

- ◆実践校名 守口市立庭窪中学校、守口市立第一中学校、寝屋川市立第二中学校、寝屋川市立第十中学校、交野市立第二中学校
- ◆主題名 集団の中での役割と責任を自覚する **道徳の内容 B 感謝**
- ◆ねらい 周りの人たちの温かい心に気づき、それに感謝し、応えようとする態度を育成する。

◎ 中心的な発問

チームメートからの拍手に対して深々と頭を下げた僕は誰に対して、どのような気持ちだったでしょうか。

◆ 本時の展開

	学習活動	発問と予想される子どもの反応	指導上の留意点及び評価
導入	◎教師の説明を聴く。	【導入】最近、周りの人に対して感謝したことはありますか	かんたんに
	資料を読む。 登場人物や物語の確認 ◎診断後のぼくの気持ちを考える。	資料の配付 ・ぼく、監督、父、チームメート ・物語の確認 【基本発問1】「家への道をたどりながらさまざまながことが脳裏に断片的に浮かんでは消えた」このとき、どんなことを考えていただろう。 ・もう終わりだ ・野球が出来なくなる ・チーム状態はバラバラ、自分は怪我、最悪。 ・せっかく頑張ってきたのに	ゆっくりはっきり かんたんに 【留意点】診断後、これからのことを考えると絶望的な気持ちであることをおさえる。
展開	◎父の言葉をうけたぼくの気持ちを考える。	【基本発問2】父さんに一喝されたあと、布団の中でいろいろなことを考えていた。ぼくはどんなことを考えていただろう。 ・どうしろっていうんだ ・僕の野球に対する思いはこんなものなのか ・悔しい ・今自分にできることは ・試合に出ることだけが野球じゃない	【留意点】父の一喝がきっかけとなり主人公の気持ちに変化していくことをおさえる。 【補助発問】父の一喝にはどんな思いが込められているのでしょうか。
	◎拍手を受けたときのぼくの気持ちを考える。	【中心発問】チームメートの拍手に対して深々と頭を下げたとき、どんなことを感じていただろうか。 ・ありがとう ・試合に出ることが出来ないのに背番号もらえた ・みんなに認めてもらえた ・支えてもらったからなんとか頑張れた	【留意点】周りの人への感謝に気づかせるためにも、生徒の答えに「誰に対しての気持ちか」を聞いて深めていきたい。 【補助発問】また、チームメートの拍手にはどんな気持ちが込められているのでしょうか。

終末	◎文章化	【終末】この時間に学んだこと、感じたことをワークシートに書きましょう。	
----	------	-------------------------------------	--

◆評価

周りの人たちの温かい心に気づき、それに感謝し、それに応えようとしているかどうか。

◆研究のまとめ

○授業実践について、チームとしてのまとめ

- 高校野球のことをあまり知らない生徒もいて、背番号「10」のイメージが人によって違うのでその確認するのに時間がかかった。野球のポジションを図にして貼ったのはよかった。
- 授業をさらっと流していくと、「努力してよかった」「あきらめなくてよかった」「みんなの役に立ててよかった」「自分の仕事に責任感を持つ」などが多く出てくるが、そこから「自分を支えてくれたまわりの人に感謝し、自分もがんばる」という認識を持たせるのはむずかしかった。
- 授業を進めていく中で「感謝の気持ち」ということがなかなか出てこない場合は、そのような感想が出てくるような質問をする必要もある。
- 授業で内容を深めていった結果、「感謝の気持ち」以外に、生徒によって他の意見が出てくることもあった。こちらのねらい通りにいかななくても、教師がさまざまな意見も受け止めて認めていくような態度が大切だ。

○道徳の評価についての提言

●評価とねらい

◇振り返り内容がねらい（本教材では「感謝」）とずれている＝低評価、ではない。

ねらいと違うところを深めているのは、教師側の力量の問題が大きいのではないか。

●記述式ワークシートでの評価

◇記述内容がねらいに近いかな否かより、生徒自身が得たことを自分の生活にフィードバックできているかが重要。個々が授業での気づきを深め、『よりよく生きる力』を付けることが出来ていることを評価して良いのでは。

●マーク式アンケートでの評価

◇教師側の評価だけでなく、生徒の自己評価としても使える。

◇文章で自分の気持ちを表現するのが苦手な生徒もいる。「ねらいを深められたか・自分の生活にフィードバックできたか」を数値化させ、自己評価させる。

◇評価対象が心の成長のため、自己評価も評価対象とすべきである。

●参考

◇下記のような基準を参考に評価を行っている学校もある（記述式・マーク式共に）

- ・ねらいを掴め、また生活へのフィードバックが出来ている。
- ・ねらいを掴めている。
- ・登場人物に沿った考えが出来ている。
- ・関係のない意見。明らかに深められていない。

【各校での実践の記録】

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

【ワークシートより】

- ・決めたことは中途半端にせず最後までやりきることを目標にしていこうと思った。
- ・橘さんはケガをしても監督とチームメイトから信頼してもらいすごいと思った。
- ・背番号がもらえることが当たり前ではなくて、ちゃんと感謝して、もらえない人の分を全力で頑張ることが大事。
- ・自分のキャプテンをやっていて、すごく共感出切る部分がありました。チームメイトの大切さを分かりつつも、少し強く言ってしまう。でも、みんなのために何か貢献したいという気持ちがあったと思う。そして、最後にチームメイト、監督に「ありがとう」という事を示せる事は本当に大切。

◇自分の生活、特にクラブ活動と結びつけ考える生徒が多かった。

【授業の中心発問より】

◇礼をする主人公が「感謝する側」というねらいを感じ取りにくいクラスがあった。どちらかと言えば、ワークシートに多いように「努力」や「継続」の結果…、というような内容が多く上がった。

【授業者より】

◇2年の11月後半の授業ということで、部活動では3年引退後、新編成になりキャプテンを中心に部員の意識も変化していく時期であったので、授業内容には生徒は入りやすく、友人の発言に対して肯定的な反応が見られる中、授業を進行できた。

○成果と課題

〈成果〉

- ・「今日の道徳はどんな内容をするのか」「どの先生がするか」など、道徳について聞く生徒も増え、道徳の授業を楽しみにする生徒が増えた。
- ・ローテーション道徳を行った学年では、全教師が授業し、お互いに参観することで教師も道徳に対して苦手意識が無くなった。

〈課題〉

- ・指導案や教材は学年の道徳担当が全て準備、決定したが、今後は誰でも指導案を考え、授業が行えるよう、研修等が必要である。
- ・平成 31 年度からの教科化に向け、全教員が道徳授業に関わりを持ち、浸透させていく必要がある。また、評価に関しては今後も検討していく必要がある。
- ・道徳の授業回数が増えることで、生徒も少しずつ慣れてきているが、自己評価などが浅いところも見られた。読み物教材だけでなく、色々な切り口で授業をできるように方法を工夫していきたい。
- ・行事や学年の取り組みなどがあり、道徳の授業を行う時間的余裕が無く、回数が少なかった。
- ・全 24 内容項目がある中で、一つずつの項目を深く掘り下げるのは難しいが、授業後のつながりを意識し、普段の学校生活に還元する働きかけが必要である。
- ・読み物教材の場合、内容を追うことで時間が足りなくなることが多いため、学年クラスの実状に応じて、同教材でも発問の仕方・タイミングを考える必要がある。

実践校名(守口市立第一中学校)

◆実施学年（2年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

普通に授業をすすめると、中心発問では「皆から認められて嬉しい」「努力してよかった」という意見が多かった。「誰に対して頭を下げたのか」という問い返しをすると、ねらいである『感謝』に関連した意見が出てきた。

「僕が深々と頭を下げたのは何故か」に対する答え

- ・監督に10番の背番号をくれたことに対する感謝
- ・ベンチに入れたうれしさ、部員やお父さん、監督に対する感謝
- ・認めてくれた部員や監督に対する感謝
- ・骨折しているのにベンチに入れてありがたい
- ・共に過ごしてきた戦友たちへ感謝
- ・みんなに努力が認められた
- ・これまで俺についてきてくれてありがとう
- ・よろしく
- ・父のあの言葉のおかげで今ここにいるので、父も含め皆に感謝
- ・故障者の僕を選んでくれてありがとう
- ・選んでくれてありがとうの気持ちをしっかり伝えたかった
- ・名前を呼ばれて拍手をしてくれて嬉しくて感謝
- ・チームに対して「頑張ります」という気持ち
- ・グラウンドに立てなくても、チームを支えることができると自信を持てたという気持ち
- ・ケガをしたのに見捨てず、一人の部員として受入れてくれた
- ・まじか…選ばれたなら自分ができることをしっかりやらないとあかん…
- ・支えてくれた人に感謝
- ・できるだけのことをちゃんとしないといけない
- ・この野球部のキャプテンになれたことを誇りに思う
- ・絶対に甲子園に行くぞという強い気持ち
- ・申し訳ない気持ち
- ・ちゃんと野球を続けてよい仲間に出会えたからよかった
- ・嬉しいけど、試合に出ていないメンバーに申し訳ない気持ち
- ・「野球やめんでよかったあ」という気持ち
- ・ベンチで応援していくから、みんな頑張ってもらいたいという気持ち
- ・自分自身も部活でけがに悩まされて、治療中はイライラした。クラブのサポート役として参加していた共感した
- ・「主人公すごいなあ。心が強いなあ。自分だったら部活が投げやりになってしまう。」という意見が多かった。
- ・気付かせたいこと。自分が多くの周りの人に支えられていること。何もかもが「当然」で、日々の生活が送れているわけでもない。今の自分があるのは、自分だけ頑張ったからではない。周りへの感謝の気持ちを持たせる。それに応えるように行動する。また、自分も周りを支える。

〈教師からの言葉かけなど〉

- ・クラブ、学級、家庭、習い事…様々な（小）集団の中で頑張っているか。自己中心的になっていないか。文句ばかり言っていないか。誰かのせいにしていないか。自分だけ頑張れていると思っていないか。自分を支えている存在を忘れていないか。周りに頑張っている人はいないか。
- ・誇りある行動をとれているか。

★キーワード 感謝 謙虚 誠実 正直 真摯

★登場人物の考え、心情だけで終わらない→「なぜ」そのような行動をとったか、道徳的価値、生き方に気付かせるのを目的とした道徳授業を行っていききたい。

○成果と課題

- ・こちらの「ねらい」通りにいかないこともあるが、概ねは意図した結論に気付く。
- ・どのような意見を言っても、「否定されない・馬鹿にされない」という雰囲気を作り上げるのに時間がかかる。ただ、いったん作り上げると、のびのびと発言をするようになる。その中で子どもは（教師も）、自分以外様々な価値観に気付き、それらを受け入れるようになる（まだまだ途中ですが）。この「新たな価値観の気付き」「受け入れ」「肯定」「安心」は道徳の授業以外の普通の授業でも大切なものである。
- ・感想の共有をもっと全体にしたい。
- ・語っているうちに時間が足りなくなることが多い。
- ・道徳の授業は何回もすることによって、少しずつ子どもの成長が見られるものである。地道に続けることに意味がある。

実践校名(守口市立庭窪中学校)

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

◎中心発問に対する意見の内容から

- ・「みんなから認められて嬉しい」「努力してきてよかった」といった内容の意見が多かったが、多くの人々の善意や支えに対する感謝という点で、もう少し深める必要があると考えた。そこで、指導者から『主人公が「何に対して」頭を下げたのか』という問いかけを行った。その結果、「認めてくれたみんなへの感謝」といった意見が出るようになった。
- ・しかし上記の問いかけでも、ねらいの中でも多くの人々の善意や支えに対する感謝、という点において、さらに深める必要があった。よって、生徒の考えをさらに深化させるために、『(普通のお辞儀ではなく)「深々と」頭を下げたのはなぜか』、『背番号10とはどんな番号なのか』という問い返しを行った。その結果、「(父親まで含めた) 支えてくれた全ての人への感謝」といった意見が出るようになった。

◎終末場面での感想から

- ・ねらいにより迫るため、自分で考えた感想を班内で共有し、それを発表することにより、自分の意見だけでなくクラスメートの意見によりさらに自分の考えを深められるようにした。しかし、実際にはいろいろな意見があるということに自覚するに留まり、自分の考えをより深めるまでには至らなかった。

○成果と課題

◎成果

- ・ねらいに迫るための仕掛けとして行った「問い返し」や「感想の共有」は、生徒の学びを深めるという意味においては一定の効果を挙げたと思われる。

◎課題

- ・「問い返し」や「感想の共有」が共に、個々人の生徒の学びに留まってしまい、それを全体に波及させることは出来なかった。次回以降の実践では、「問い返し」の内容に基づいて中心発問をさらに焦点化させるなどの工夫や、「感想の共有」について考えて欲しい感想を取り上げて全体への発問に還すといった共有化を行っていくことで、より生徒自身が自分たちの力でねらいに迫れる工夫をしていきたい。

実践校名(寝屋川市立第二中学校)

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

- ・発言しやすいようお互いで助け合い、自分たちに拍手をすることができるような姿があった。
- ・中心発問ではあらゆる人に対する感謝や、御礼の気持ちを考えることができていた。
- ・自分たちが拍手をする場面・される場面ではどうだろうかというように実際の場面に置き換えて考えていた。
- ・ワークシートでは「周りに支えられている」「悩んでも最後には周りに感謝できるような生き方をしたい」という感想や「実際に自分もクラブでケガをしたけれど試合に出してもらえて先生や周りの仲間に感謝している」という言葉があった。

○成果と課題

〈成果〉

- ・終始周りに感謝し、助け合おうかという雰囲気ができていた。
- ・誰に対してのどういう気持ちかを考えることで周りへの感謝について多くの意見が出た。
- ・資料の内容を身近に感じる生徒も多く、自分に置き換えて考えることができていた。

〈課題〉

- ・よりねらいに近づくために導入や発問、問い返しを工夫する必要がある。
- ・中心発問でねらいにせまるためにもしっかり考える時間をつくることや、ワークシートの形式を工夫することも大切である。

実践校名(寝屋川市立第十中学校)

◆実施学年（2年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

- ・ 中心的な発問に対する答え

「ありがとう。」「今まで続けてきてよかった。」「キャプテンとして自分ができることを精一杯やれてよかった。」「みんなの役に立ててよかった。」「今まで以上にチームを盛り上げていこうと思った。」などという感想が多かったので、「自分がケガをしているのに選ばれたことは本人としてどう思ったかなあ？」という問いかけをすると、「自分はベンチ入りしていいのかなあ？」「ケガをしている僕が選ばれたことに文句を言わないチームメートはすごい。」「ケガをしている僕を選んだ監督は人のことを思いやれる人だと思う。」など僕の気持ちだけでなく、チームメートや監督の気持ちまで押し量っている意見も出てきた。

○成果と課題

- ・ 振り返りシートの中で、「父の言葉が何より支えになった。」「お父さんの言葉が主人公の気持ちを大きく変化させることができた。」「父の言葉とチームの仲間のおかげで、キャプテンとしての自覚を持つことが出来た。」等、父親の発言に注目する子どもがかなりいて、そこから父親との関係の話に発展していった。普段はあまり聞けない家族での父親とのやりとりが聞けてよかった。
- ・ 「自分一人で考えるのだけでなく、班の中でグループ討議をすることで他の人がどんなことを考えているのかが少し分かり、それまでより仲良くなった。」という生徒の意見や、グループ討議を取り入れることで、授業がいつもより和やかな雰囲気になった。
- ・ スポーツをしていない生徒にとっては、野球のポジションを図に書いて貼ったことがよく、他のスポーツの話題も出てきて最初に興味を持たせることができたが、背番号「10」のイメージが人によって違うのでその確認をしっかりとするのに少し時間がかかった。
- ・ 少し視点を変えて、「もし、自分が監督ならキャプテンをベンチに入れるか？」で生徒に考えさせていろいろな見方、考え方、意見も交流し合う場になりよかった。
- ・ 子どもにとって身近に感じる教材だったことでいつもより、活発に意見を言う生徒が多かった。
- ・ 国語力の差が評価を左右しそうな気がするので、評価の基準などとしても難しい部分が多い。
「きちんと授業に参加できているのか？」なども評価の基準のひとつになると思う。
- ・ 教師も生徒も評価を意識しすぎると道德の授業の目的がずれてしまわないか心配だ。

実践校名(交野市立第二中学校)